

キャラクター名
マリィ・ノット

プレイヤー名

シンドローム	ブラム=ストーカー ノイマン	ワークス	レネゲイドビーイングC	カヴァー	
	オプショナル	ウロボロス	年齢	性別	女性
覚醒	生誕	衝動	憎悪	初期侵食率	40 %
出自	待ち望まれた子	経験	死と再生	邂逅	保護者

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	28
肉体	1	0	0			1	行動値	10
感覚	2	0	0			2	(非装備時)	10
精神	4	1	0	1		6	戦闘移動	15
社会	1	0	0			1	全力移動	30

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			RC	6		交渉	1	
回避			知覚	1		意志	1		調達		
運転:			芸術:			知識:			情報: UGN	1	
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
		0				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品	
サンギン	
ストレンジフェイス	

合計装甲:	0	合計回避:	0
-------	---	-------	---

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイム	消費
変異種	P	N		
「王妃の記憶」	P 懐旧	N 隔意		
イブ	P 幸福感	N 不安		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P:	2	残り財産P:	2
--------	---	--------	---

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果: 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果: コスト分のHPで復活								
ヒューマンズネイバー	1		常時	至近	自身	自動	RB	
効果: 意思判定D+Lv/侵蝕でレベルアップはしない								
オリジン:レジェンド	3	1	マイナー	至近	自身	自動	RB	
効果: シーン中の【精神】使用判定達成値+「Lv*2」								
鮮血の奏者	2	4	セットアップ	視界	単体	自動		
効果: Lv点以下の任意のHPを消費/対象のR中攻撃力「消費したHP*3」								
ブラッドスパイク	2	3	メジャー	至近	範囲(選択)	RC		
効果: 攻撃力+「Lv*3」の射撃攻撃を行う/HP3点消費/1R1回								
変異種:ロイヤルブラッド	2	3	メジャー				シンドロームDロイス	
効果: D+5個、1シナリオLv回								
C・ブラム=ストーカー	3	2	メジャー				シンドローム	
効果: C値-Lv								
生き字引	1	1	メジャー	至近	自身	意思		
効果: 全ての「情報:」の代わりに使用可能/情報収集判定D+Lv個								
クイックダッシュ	1	4	セットアップ	至近	自身	自動		
効果: 戦闘移動を行う/1シナリオLv回								
イージーフェイカー:無上厨師	★							
効果:								
シャドウダイバー	★							
効果:								
まだらの紐	★							
効果:								
ブラッドリーディング	★							
効果:								
効果:								

とある研究施設で『製造』されたレネゲイドビーイング
残された物品を核に、人の噂や伝承で肉付けされたゴーストライナー。オリジン:レジェンドのRBを誕生させる事が研究目的であったが作りだされた少女は伝承や史実そのものではなく、『もしかしたら、こうだったかもしれない』という側面から形作られてしまったため、失敗作として廃棄された。

本来は、フランス王朝最後の王妃として断頭台の露に消えた悲劇の女性そのもの、となるはずだった少女けれど少女の核になってしまったのは、その生涯ではなく断頭台の上で幾多の群衆から向けられる憎悪と、それへの嘆きと憎しみ民を愛でる存在ではなく、衆愚に陥ったニンゲンこそを憎むモノ。けれど――

そもそも、噂や伝承、史実を根幹として形作られた記憶や感情が、真実そうであるという確証すらない『そうあれかし』と望んだどこかの誰かが、過去に過ぎ去った歴史を見届けているはずもない胸の奥にくすぐる嘆きと憎悪ですら、虚ろなものかもしれないとしたら

生誕の最中、制御の利かない能力は当然のように暴走し、自身を産み出した研究所を壊滅させるそして廃墟の只中、ただ一人降りしきる雨の冷たさに体は凍えそんな冷たい手を取ってくれたイブの掌の暖かさが、少女の自意識が目覚めた瞬間。誕生日といえる時だったその温かさだけは、離れず始まりの中でただ一つ、今でも鮮明に思い出せるその後、流されるように彼女と生活を共にして現代の常識を学びつつ、自分は どう生きて行けばいいのかをぼんやり考えながら過ごしていた

性格は一見して天真爛漫、誰にでも優しく振る舞えるが根本的に厭世的でやっばち。言葉の端々にそういうモノが滲み出るときがあるけれど、そんな自分が歪であるという自覚はあるためか、例えばイブに指摘されたりすると素直に謝る